

三保松原・マツ材線虫病被害の状況

— 微害傾向を維持 —



技術情報 VOL.3-3

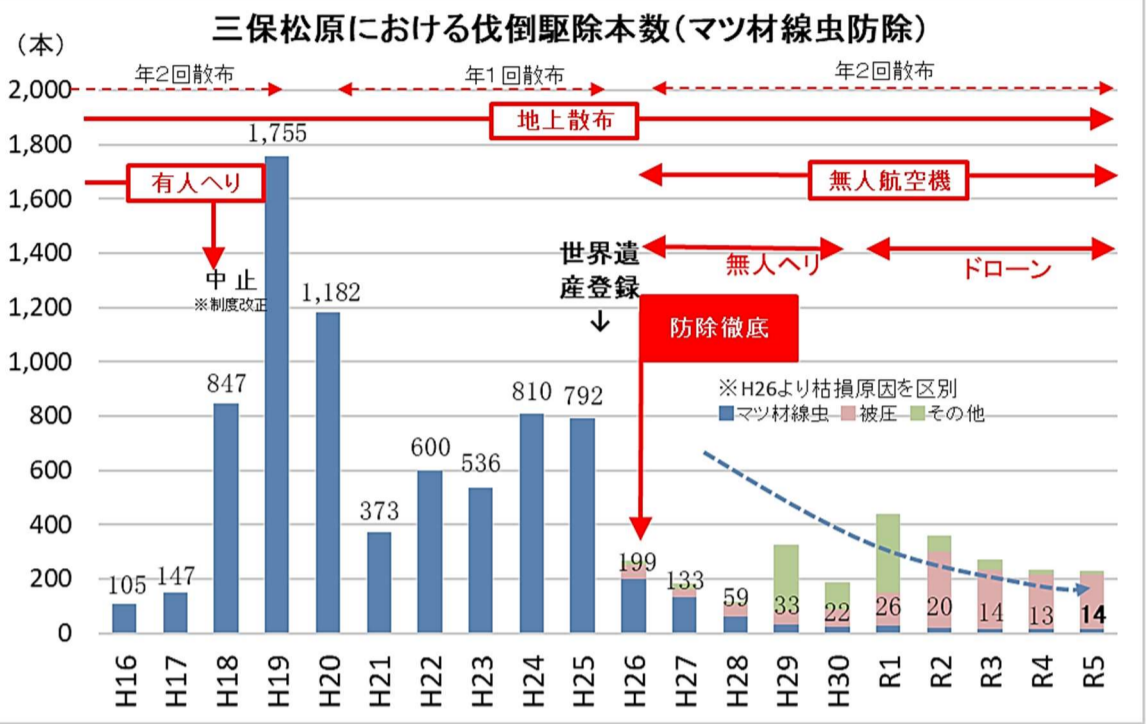
(調査・検証) 一般財団法人三保松原保全研究所 R6.6

●被害の背景・推移

マツ材線虫病は、“世界4大樹木病害”に数えられるマツに激烈な被害をもたらす伝染病であり、病原体のマツノザイセンチュウと媒介者のマツノマダラカミキリにより引き起こされる。

三保松原では半世紀以上前から発生が確認されており、15年程前は微害を維持していたが、平成18年度に有人ヘリによる薬剤散布区域を地上散布に切り替えたことで(制度改正による)、2年間で被害木が約12倍に激増した。

その後も高止まり状態が続いていたが、平成25年度の富士山世界文化遺産構成資産の登録を契機に防除が徹底され、再び微害化している。



●被害の場所



◎近年の被害傾向

平成29年度に、防除目標値(1本/ha = 34本/年)以下を達成し、以降、維持している。

令和5年度の枯損木のうちマツ材線虫病被害は14本と前年度から1本増加したものの、微害を維持している。

近年特に被害が多かった半島南端は収束に向かっているが、半島北端の旧三保文化ランド周辺の被害が微増傾向にあり注意が必要である。



マツノマダラカミキリ



マツノザイセンチュウ

◎その他要因

令和3年度には、前年の高温少雨による水分ストレスが原因と考えられるまとまった量の枯損が発生した。

その後、降水量は平年並みから多い年が続いているものの、平均気温については、観測史上上位の高温を記録する月が増加している。温暖化はマツノマダラカミキリの生息分布・活動期間を広げ、マツ材線虫病のリスクを高める要因となることから、降水量と同様、注視する必要がある。

